

第3章 京大病院遺跡 AF14 区の発掘調査

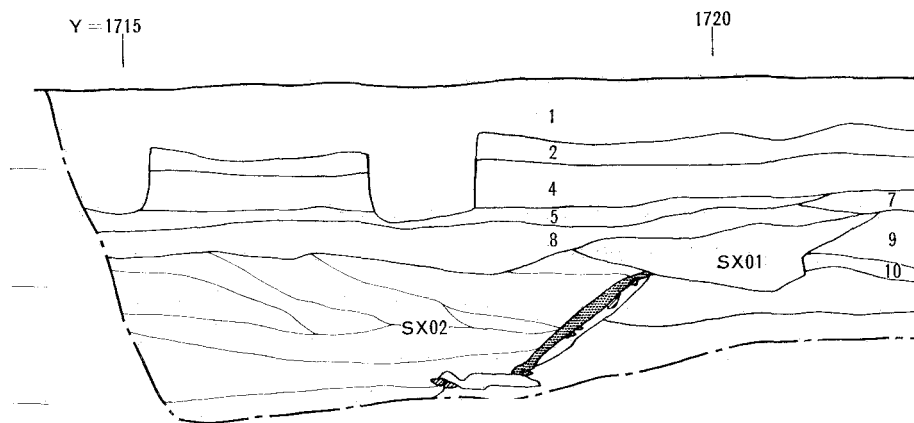
岡田保良 宇野隆夫

本調査は昭和51年度の京大病院遺跡 AE15 区の発掘調査にひきつづく医療技術短期大学部校舎第2期新営工事予定地の発掘調査である。本調査地区は旧眼科教室跡地で面積 793 m²、昭和51年度調査地区の北側に接し現在の鴨川の東約 300m のゆるやかな扇状地上に立地する(図版 1-39)。構内座標 X=875(東西方向) Y=1730(南北方向)のラインに沿って層位観察用の畔を残し、調査地区を4区画に区分して発掘をすすめた。各区画は東北、東南、西北、西南の順に N1 区、N2 区、N3 区、N4 区と仮称する。掘削は、表土(近・現代の盛土)、旧建物基礎、および近世以後の耕作土の大部分を機械によって除去し、同耕作土の一部と以下の堆積層を分層発掘した。全体の平面図は平板によって50分の1の図面を作成し、壁面層位と各遺構の詳細は、構内座標を割り付けて10分の1または20分の1の図面を作成した。昭和52年6月15日に調査を開始し、同8月31日に現場作業を終了した。

1 層位

現地表面は、発掘区の東北部で標高 46.7m、西南部で 46.6m を計りほぼ水平である。この近・現代の盛土から砂礫層に至るまで、基本的には上から、表土(第1層)、黒色耕土Ⅰ(第2層)、黄灰色礫土(第3層)、黒色耕土Ⅱ(第4層)、黄褐色土(第5層)、茶褐色土(第6層)、暗褐色土(第7層)、灰色砂礫(第8層)、礫混暗褐色土(第9層)、暗灰色シルト(第10層)、赤褐色砂礫(第11層)、ピート混砂礫(第12層)、灰色粗砂(第13層)、橙色砂礫(第14層)、シルト混砂礫(第15層)の堆積となる(第7図)。

第1層は旧建物の廃材や瓦礫を包含する表土である。第2・4層は耕作土で、第4層は江戸後期のもの、第2層は明治時代まで耕作が続けられていたことを示す土層である。第3層は膨しい礫とわずかな江戸末の遺物を含み、鴨川の氾濫による堆積とみられる。第2層は第4層の上にいる第3層を切っている。第5層は北東から南西にかけて緩く傾斜し、N3・4区で削平を受けて段差を生じ、そこに第4層の厚い堆積をみる。第6層はよくしまった砂質土で、N4区の大部分を除いてほぼ全面にうすく検出でき、一時的な生活面であった可能性がある。第5・6層は鎌倉～室町前期頃の遺物を出土する。第7層は N4 区を中心に検出した層で、平安末～鎌倉初期の遺物を出土する。第8層は鴨川の氾濫による堆積で平安末頃の遺物を出土する。第9・10層は、N4区の一部にだけみられる堆積で平安後



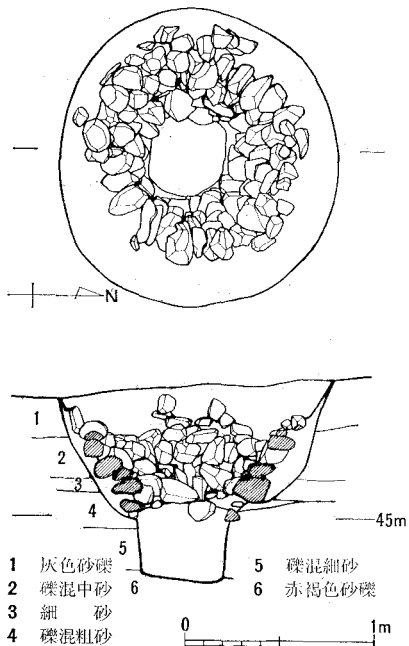
第7図 N4区北壁の層位

期の遺物を多数包含する。後述する川 SX02 の埋没後に堆積しかつ SX01 に切られる。第11～15層は厚く堆積する砂礫層である。第11層から奈良時代の須恵器，第12層直上から弥生土器が出土し，以下の砂礫層では遺物が出土しなかった。

2 遺構

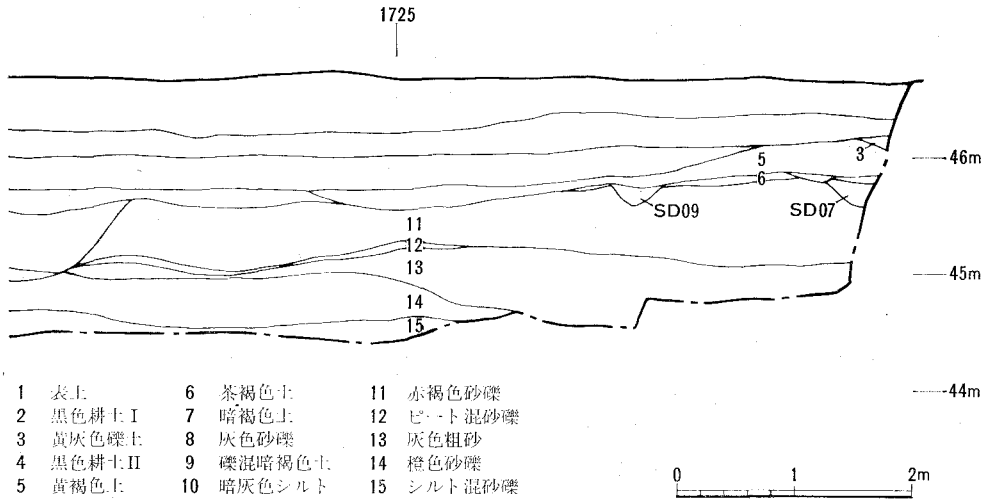
今回の調査により，護岸工事を施した川1，井戸と野壺26，溝10，柵列20のほか多数の

ピット，ラチス状掘形列，石列を検出した。以下主な遺構について記述する(第10図)。



第8図 井戸 SE13 平面と断面

川 SX02 N3・N4区を方位をやや西に振って南北方向に流れる川である。東岸の斜面に護岸工事と考えうる粘土を検出した(図版7-3・4)。肩から斜面上に細砂もしくは礫を敷き，厚さ5～10cm程度の青灰色粘土を貼り付けている。粘土の東では砂礫が水平に堆積するのに対し，西では東下がりに傾斜をもつ埋積状態を示す。粘土面の上端と下端との幅は場所によって異なるが，垂直距離で1m前後である。粘土は上端，下端ともに幾分かの水平部分をとどめ，斜面の上下限を示す。この部分が常に水没していたとは限らないが，東側にひろがる砂礫の崩れを防ぐためのものであろう。粘土内と川の堆

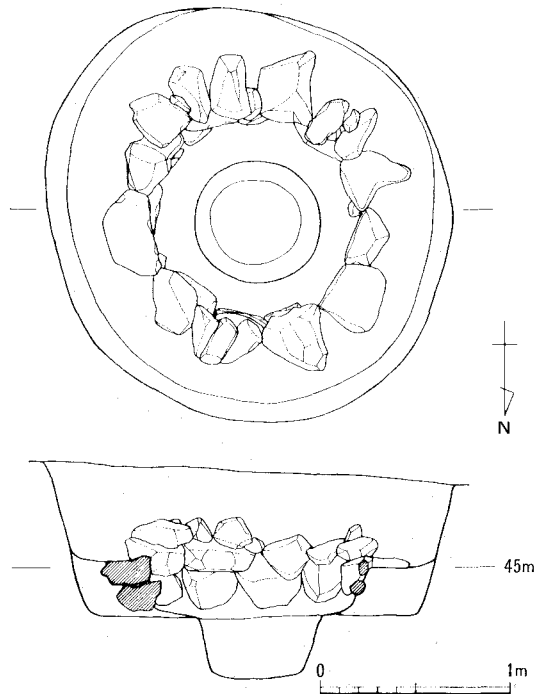


積から平安中期の土師器皿が出土した(第40図1・雲)。埋積砂礫中にはチャート、硬質砂岩など高野川系の礫が大部分を占め、SX02が高野川もしくはその支流であると考えうる。これらの点から、平安中期には鴨川以東の開発のために高野川の改修工事が行なわれていた可能性を考えている。なお今

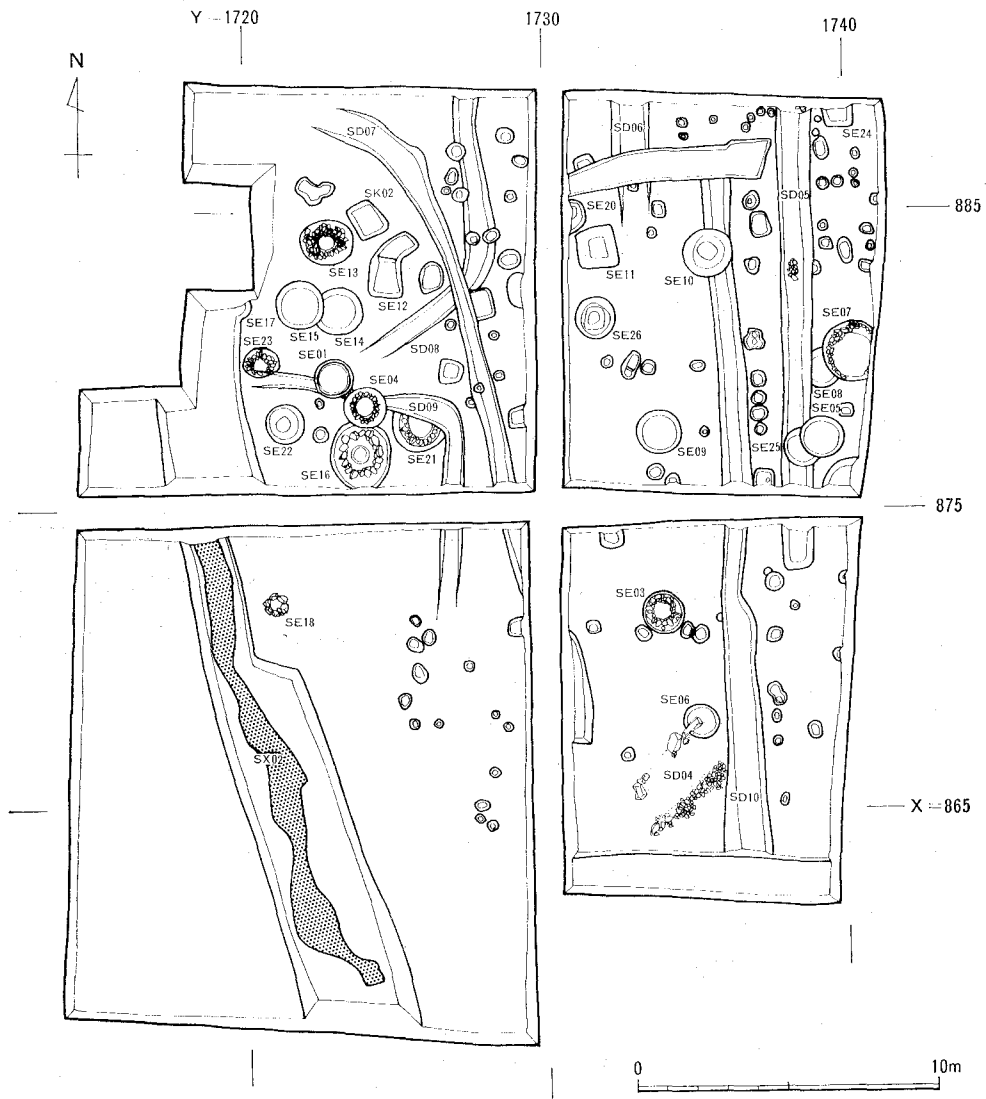
回確認した約20mにわたる東岸の肩は、北から南へ100分の3.5ほどの勾配を有する。

井戸 26個の井戸および野壺が出土したが、構造や掘り方は多様である。年代はSE01～05が江戸後期から明治時代、SE06が室町後期、SE07～24が平安後期である。SE25・26は遺物の出土がなく年代が定まらない。

SE13は、直径が上面で約1.5m 下面で約80cm 深さが約60cmの掘形を設け、底に直径約50cm 深さ約35cmの穴を穿って井筒を埋め込む。その上に大きいものでも20cm程度



第9図 井戸 SE16平面と断面



第10図 発掘区遺構平面

の河原石を朝顔状に組み上げる(第8図, 図版8-1)。

SE10は, SE13と同様の掘形をもつが石組がない(図版8-2)。

SE16は, 掘形の直径が上面で2.1m 下面で1.7m 深さが約80cm と大きく, 大ぶりの石をほぼ垂直に積みあげる(第9図)。

SE21は, SE16と同様の掘形を有するが井筒がない。また石組はやや小ぶりで小口に積

む傾向がある。

SE20は、上面径約1.6m 下面径約40cmの掘形を穿ち、下面いっぱいの径の井筒を据えて掘形に砂礫を詰めるという構造をもつ(図版8-4)。

SE12は、平面形が1辺約1.2mの方形の掘形をもつ。底面上に方形に粘土が堆積し、木製の板を組み合わせた1辺70cm余の正方形の井筒を据えたことがわかる(図版8-3)。

SE05・06は井筒の痕跡がない素掘りの井戸である。

SE03・04はともに石組の深い井戸で、近世以降の地下水位の低下を示している。SE04は鴨川・高野川流域の河原石を組んだもので、底面と石組との間に打ち込んだ杉板が遺存する。しっくい造りの野壺SE01とひと組にして用いられた野井戸である。SE03は白川石と呼ばれる花崗岩の大ぶりの石を用いて組み上げられた井戸で、石組の下に松材で組んだ枠の痕跡をとどめる。旧眼科教室建設時(明治43年)に埋め戻されたものである。

溝 SD10はN1区中央付近で幅80cm 深さ30cmを計り、N2区南端近くでは幅1.5m 深さ45cmに達する。断面はやや偏平なV字形で、埋土はN1区内では殆んど粘土であるのに対し、南部では青灰色土乃至暗褐色土が堆積する。平安後期を中心とする遺物を出土し、昭和51年度に発掘した溝SD102の方向と一致することから、平安末の白河の条坊に伴う遺構である可能性を残す。

SD07・08は、N3区の平安後期の井戸群に伴う施設である可能性がある。SD07はSD08を切り、SD08からは播磨系の唐草文軒平瓦Ⅱ49が出土した(図版9)。

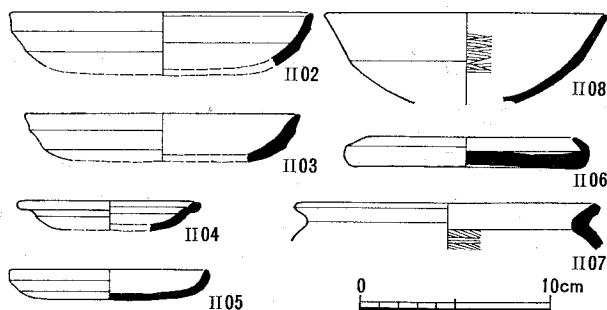
SD05は幅1.1m 深さ60cmを計り、断面は整った台形を呈する。南北方向で、N1区の北へはのびるが、N2区北部で南の端となりこの溝は終る。埋土は黄褐色粘土で人為的に埋められた可能性がある。室町後期の土師器皿、瓦器羽釜が出土した(第15図)。

SD04は北東から南西方向に走る溝状遺構で、両肩に沿って大石を用いて壁を形づくっている。用いた石の中には花崗岩に加工を施したものが2点含まれる。室町後期の井戸SE06が西肩の大石の下から検出されている。

柵列 黒色耕土を削平した段階でおよそ20列の方形ビット列を検出した。丸太杭のような柱を埋め込んでいた跡で、耕地に伴う柵状の遺構とみなされる(図版6-1)。昭和51年度のAE15区の調査でも同様の遺構を約50列確認している[京大埋文年報77]。

3 遺 物

弥生土器、土師器、瓦器、須恵器、中世陶器、近世陶磁器、輸入陶磁器、瓦、土製品、金属製品がコンテナ約90杯分出土した。これらは現在整理中であるため主要なものを層位



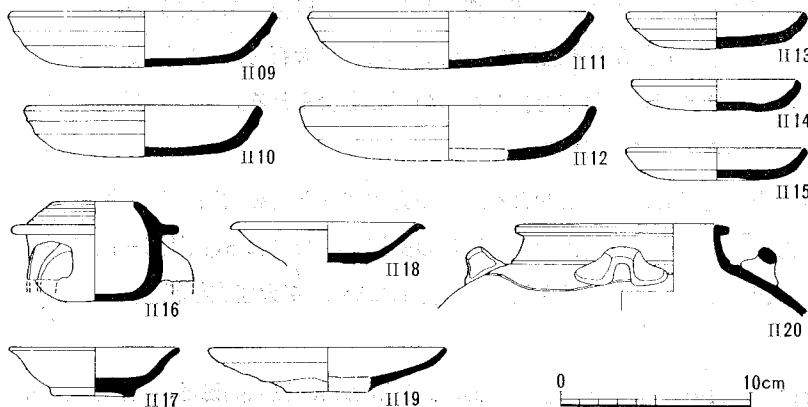
第11図 井戸 SE20 出土の土器

または遺構ごとに記述する。

赤褐色砂礫(第11層) 弥生土器が4点出土した。II 01は壺の肩部の破片で篋描き沈線文を施す。胎土は砂粒を多く含み、外面に磨き、内面に撫でを施す。畿内第Ⅰ様式新段階に相当する(第32図)。

暗灰色シルト(第10層) 土師器, 灰釉陶器, 輸入陶磁器が出土した(第12図)。II 09~15は土師器皿である。調整は底部内面に撫で, 底部外面と体部外面に指押えまたは撫で, 口縁部内外面は横撫でを施す。本遺跡出土の土師器皿には殆んどこの調整を施している。II 12は口縁部に2段の横撫でを施し, 端部を丸くおさめる。II 09~11・13は口縁部に2段の横撫でを施し, 端部に面取りを行なう。II 14・15は口縁部に1段の横撫でを施し, 端部に面取りを行なう。II 16は三脚のある土師器羽釜である。口縁部が内傾し, 口縁部と鋳上面に螺旋状の篋描き沈線文を施す。鋳の直径が9.0cmの小型品であるが, 外面に煤が付着しているため, 何らかの実用に供したと考えている。II 17は灰釉小碗である。器形は皿に近く, 高台に靱痕がある。灰釉陶器の終末期のものであろう。II 18~20は輸入陶磁器である。II 18・19は白磁皿, II 20は褐釉四耳壺である。

SE20 土師器, 瓦器, 輸入陶磁器が出土した(第11図)。II 02~06は土師器皿, II 07は土師器甕, II 08は瓦器碗である。II 02・03は口縁部に2段の横撫でを施し, 端部を丸く



第12図 暗灰色シルト(第10層) 出土の土器

おさめる。

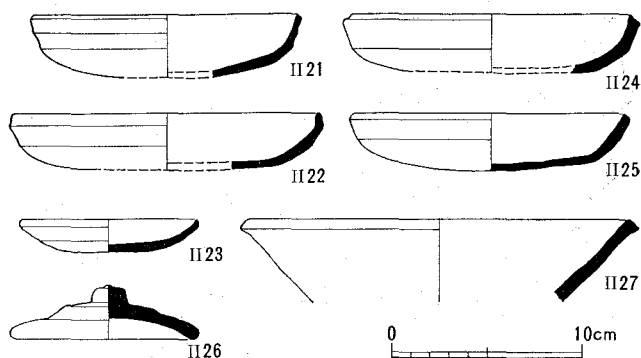
II 04は口縁部を外反させ端部を内側に肥厚させる。II 05は口縁端部をつまみ上げるように撫で調整を

施す。Ⅱ06は扁平な皿である。第7層から別の皿と融着した扁平な皿Ⅱ28が出土した(第14図)。融着したまま用いていることからみて扁平な皿は台皿である可能性がある。Ⅱ08は内面に荒い篋磨きを施すだけの作りの良くない瓦器碗であるが、

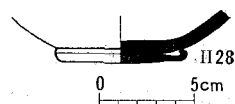
口径に比べて器高はかなり高く、高台がとれた痕がある。

SE10 土師器, 須恵質大平鉢が出土した(第13図)。Ⅱ21~25は土師器皿である。Ⅱ21は口縁部に2段の横撫でを施し, 端部に面取りを行なう。Ⅱ22・23は口縁部に2段の横撫でを施すが, 上段の横撫でが口縁端部をつまみ上げたようになる。Ⅱ24・25は口縁部に1段の横撫でを施し, 端部に面取りを行なう。Ⅱ26は土師器の蓋である。須恵質大平鉢Ⅱ27は口縁端面が器壁外面とはほぼ直角をなす。

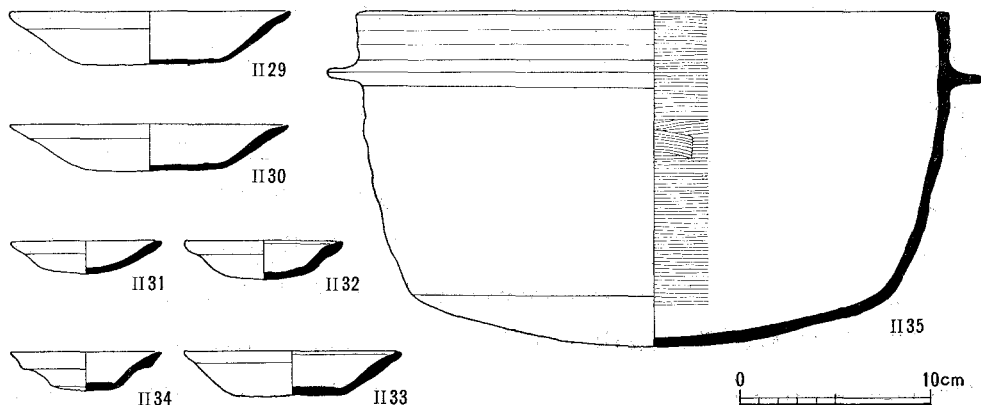
SE11 土師器, 瓦, 石鍋が出土した。土師器は出土量が少ないが, 口縁端部をつまみあげる皿がある。軒瓦は4点出土した(図版9-Ⅱ44~47)。Ⅱ44は播磨系の蓮花文軒丸瓦で, 六勝寺跡出土品に同范例がある〔杉山・岡田61, 円勝寺発掘調査団72, 六勝寺研究会76〕。Ⅱ45は中央官衙系の巴文軒丸瓦で, 栢杜遺跡八角円堂に同范例がある〔烏羽離宮跡調



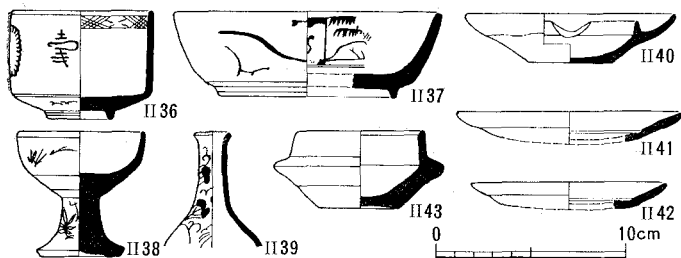
第13図 井戸 SE10 出土の土器



第14図 融着した土器



第15図 溝 SD05 出土の土器



第16図 野壺 SE01 出土の土器

査研究所75]。

SD05 土師器,
瓦器が出土した(第15
図)。II 29~34 は土師
器皿である。口径が15
cm 前後のもの, 11.5
cm 前後のもの, 8 cm

前後のものがある。大型(II 29・30)および中型(II 33)の皿は平底をもち、体部が低く直線的に立ち上がる。口縁部に横撫でを施し、やや外反させ、端部はわずかに内側に巻く。体部内面に丁寧な横撫でを施し、見込み周縁部に圈線を生じる。II 31・32は大型と似た特徴をもつが、底はやや丸味を帯び圈線を生じない。II 34は他と異なり、体部の指押えが強い。ため圈線が凹線状になり、また口縁部下端が肥厚する。II 29~33が埋土の黄褐色粘土中から出土しているのに対し、これのみは粘土上面からの出土である。瓦器羽釜II 35は底部が下方にやや突出し、体部と口縁部がやや外方にまっすぐ立ち上がる。口縁端面と外面および鐙に横撫で、体部と底部の外面に指押えの上に撫で、内面に刷け目を施す。SD05 出土の瓦器羽釜には、口径が24cm 前後のもの、27cm 前後のもの、30cm 前後のものがある。

SE01 近世陶磁器、土師器が出土した(第16図)。II 36~39は伊万里で、II 36・37はく
らわんか手の碗と皿である。II 40は京焼の灯明皿である。II 41・42は土師器の皿で、見込
み周縁部に沈線を施す。II 43は土師器で、羽釜のミニチュアである。

4 小 結

今回の調査により、多くの遺構と遺物が出土し、いくつかの点が明らかになった。平安
中期の護岸跡は、六勝寺造営をはじめとする平安後期の大規模な鴨川以東の開発に先立つ
土木工事として注目される。しかし氾濫による砂礫の堆積状況やそこから出土する遺物を
みても、この護岸が長く保たれたとは考え難い。いずれにしてもこれが高野川の改修にか
かわる工事だとすると、鴨川と高野川の流路変更という平安京経営の問題を解く鍵にもな
ろう。平安後期の井戸群や溝は、昭和51年度の京大病院遺跡 AE15 区の調査の成果とあわ
せて、南に推定される白川北殿との関連でその具体的な性格を明らかにできる可能性があ
る。室町後期には溝 SD05 が現われる。江戸後期にはこの辺りは耕作地となっており、大
学の土地となるまで利用され、その間に洪水によって耕地は一時削平を受けたらしい。